

「三井式温熱療法」で免疫アップ！ 医師の私はひざ痛が改善し 緑内障の術後の視力が回復

如月総健クリニック院長
しらかわたろう
白川太郎

**がん細胞は熱に弱い！
体温を上げて対処せよ！**

私は、西洋医学（現代医学）

で「打つ手がない」と見放された末期がん患者さんを数多く治療してきました。手術や抗がん剤、放射線治療などの標準治療のみでは回復が見込めない患者さんに、私が有効と考える方法の一つが「温熱療法」。すなわち、体を温めることです。

がん細胞は、熱に弱い性質を持っています。正常な細胞では、主にミトコンドリアという器官がエネルギーを作り出して活動しています。一方、がん細胞



白川太郎

1955年大分県生まれ。医学博士。京都大学医学部卒業後、オックスフォード大学、大阪大学で研究を重ねる。オックスフォード大学医学部呼吸器科講師、ウェールズ大学医学部大学院実験医学部門助教授、中国第4軍医科大学付属西京医院呼吸器科客員教授などを経て、2000年に京都大学大学院医学研究科教授に就任。

退職後は長崎県のユニバーサルクリニック院長、東京都の医療法人白金会東京中央メディカルクリニック理事長などを歴任。2018年より福岡県の医療法人兎月会如月総健クリニック院長。

胞では「解糖系」というしくみのみでエネルギーを作っていて働いています。解糖系で働く酵素（生体内の化学反応を促進させる物質）は反応温度が低く、温度が上がると働かなくなりま

み心地がよいため、活性酸素などの物質を出して周囲の温度を下げます。ですから、がん患者さんは病状が悪くなるほど、体温が下がっていきます。体温が下がると、正常細胞はミトコンドリアの働きが悪くなって、エネルギー不足に陥り、がん細胞と戦う免疫細胞の力も低下します。ますますがん細胞

ような器具で、遠赤外線を発生して体の深部まで熱を通し、芯から温めることができます。

温熱治療器を体に当てると特に強い熱さや痛みを感じ、「アチツツ！」となる場所があります。そこが病変箇所なのですが、この「どこが悪いかが自分でわかる」のも利点の一つです。そこを念入りに温めていくと、次第に感じる熱さや痛みが減っていくのを実感できます。すると、続けるモチベーションにもなるわけです。

私も身を持って、その効果を

体験しています。

実は3年ほど前、原因不明の体調不良に悩まされました。体重は十数kgも減り、血尿が出るようになった上、ひどい不整脈が起こり、階段を4〜5段も上がると息切れするようなありさまでした。いろいろ検査したのですが、原因は特定できませんでした。

また、同じ時期に緑内障になり、もともと0.4くらいだった視力が0.01と極端に低下してしまい、夜になると周囲がほとんど見えないほどでした。

この不調のさなか、それまで体を温めるために習慣にしていた岩盤浴などにも行けなくなりました。そこで温熱治療器を試してみたのです。

血尿が出なくなり 不整脈も起こらない

効果は期待以上でした。次第に元を取り戻し、体重も回復。血尿はすっかり出なくなり、不整脈もほとんど起こらなくなりました。

緑内障は結局、手術を受けましたが、術後すぐには視力が回復しませんでした。そこで温熱器で全身をケアしたところ、次第に視力が戻ってきて、以前とほぼ同じ0.4くらいまで見えるようになりました。

体のどこを温めるのがいいかは、お悩みの症状や体質によっても異なりますが、基本として「頭頂部」「背骨」「仙骨」「足の裏」を温めるのが、全身の状態を整えるのに有効です。

三井式温熱治療器の使い方

70℃に設定して、頭頂部→背骨、仙骨→足の裏を順番に温める。1カ所につき5〜15秒。熱さや痛みが強い場所は、特に念入りに行う。

なお、腰やひざなど他に痛いところがあれば、そこも追加で5〜15秒温めるようにするとよい。



※必ず付属の布カバーを巻いて使用する。
※低温やけどに注意する。
※極端に熱い位置には行わないこと。



三井式温熱治療器

なお、温熱治療器は直接肌に当ててはいけません。衣服の上から当てる、もしくは付属の布カバーなどの当て布を使います。基本的なやり方は温熱治療器を体に当て、軽く圧を加えて「気持ちいい」と感じるまで温めます。1カ所につき5〜15秒温めたら、場所を少しずらしていきます。

温熱治療器の温度設定は、42℃から86℃までの5段階があります。通常は70℃の設定がいいでしょう。

腰やひざの痛みには、即効性が現れやすいです。私自身も、ひざ痛で階段の上り下りがつらかったのですが、温熱治療器でひざを温めていたら痛みが出なくなり、とても助かりました。